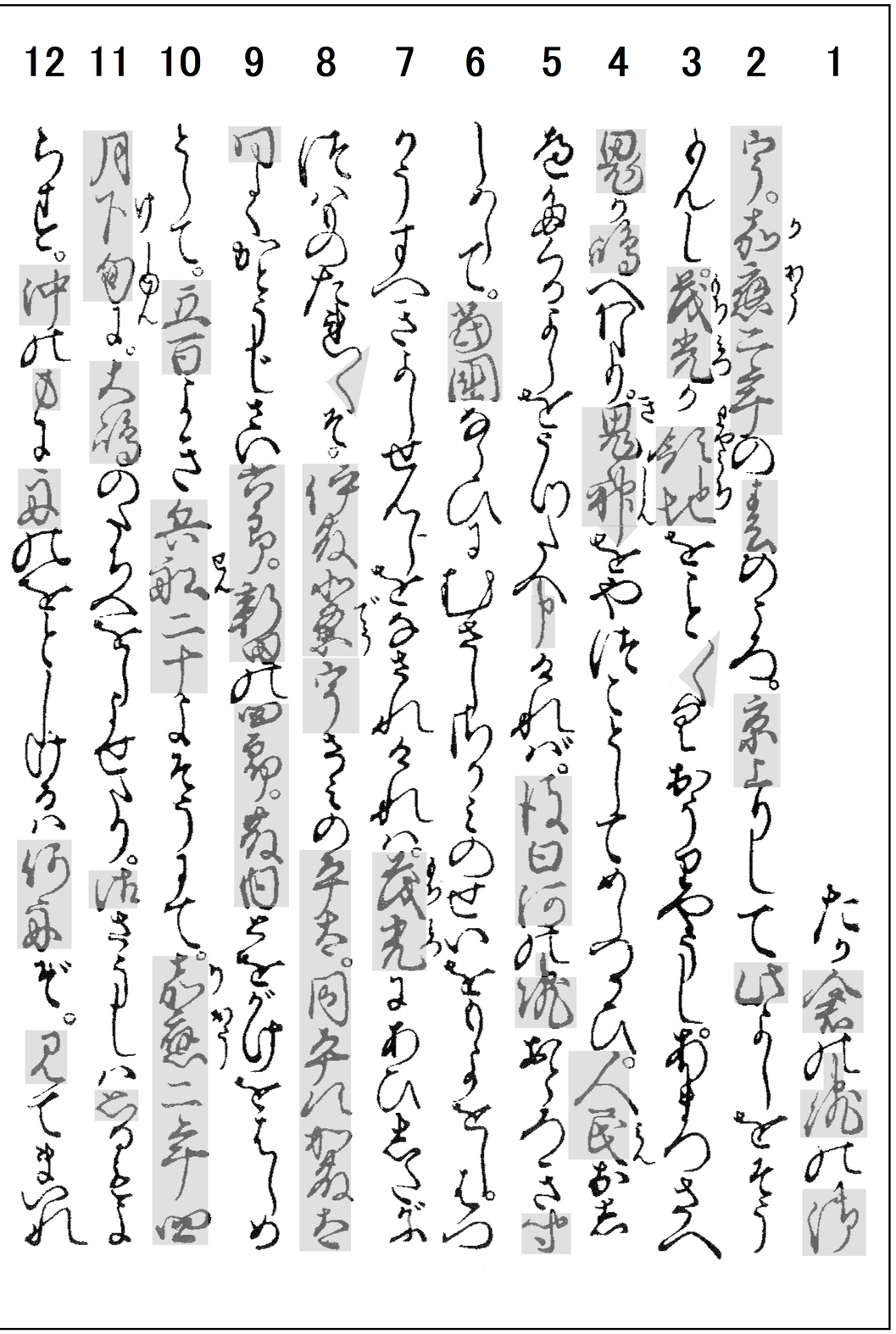


1 宇、嘉応〔かおう〕二年の春のころ、京上りして此（＝この）よし（由）をそう（奏）

2 宇。嘉応二年の春のころ。京上りして此よしをそう

3 もん（聞）し、茂光〔もちみつ〕が領地〔りやうち〕をこと〴〵（ごと）くおうりやう（押領）し、あまつさへ

3 もんし。茂光か領地をこと〴〵くおうりやうし。あまつさへ

4 鬼が島へわた（渡）り、鬼神〔きしん〕をやつこ（奴）としてめ（召）しつか（使）ひ、人民〔みん〕お（＝を）し

4 鬼か嶋へわたり。鬼神をやつことしてめしつかひ。人民おし

5 へた（虐）ぐるよし（由）をうつた（訴）へ申（＝もうし）ければ、後白河の院、おどろ（驚）き聞（＝きこ）

5 へたくるよしをうつたへ申ければ。後白河の院おとろき聞

6 し召して、当国なら（并）びにむさし（武蔵）・さがみ（相模）のぜい（勢）をもよを（催）しはつ（発）

6 しめして。当国ならひにむさしさかみのせいをもよをし。はつ

7 かう（向）すべきよし（由）、せんじ（宣旨）をなされければ、茂光〔もちみつ〕にあ（相）ひしたが（従）ふ

7 かうすへきよしせんじをなされけれは。茂光にあひしたがふ

8 つはもの（兵）たれ〳〵（誰々）ぞ。伊藤・北条〔でう〕・宇さみ（佐美）の平太・同平次・加藤太、

8 つはものたれ〳〵そ。伊藤北条宇さみの平太。同平次加藤太

9 同じくかとうじ（加藤次）、さい（才）六郎・新田の四郎・藤内とをかげ（遠景）をはじめ

9 同しくかとうじさい六郎。新田の四郎。藤内とをかけをはしめ

10 として五百よき（余騎）、兵船〔せん〕二十よそう（余艘）にて、嘉応〔かおう〕二年四

10 として。五百よき兵船二十よそうにて。嘉応二年四

11 月下旬〔げじゆん〕に、大島のたち（館）へを（押）しよ（寄）せたり。御ざうし（曹司）は、「思ひもよ

11 月下旬に。大嶋のたちへをしよせたり。御さうしは思ひもよ

12 らず、沖の方に舟のをと（音）しけるは何舟ぞ。見て参れ」

12 らす。沖の方に舟のをとしけるは。何舟ぞ。見てまいれ

たか（高）倉の院の御

たか倉の院の御

1 との給ふ。あきむ人舟やらんおほくつらなつて候と申せば。
2 よもさはあらし。我にうつてのむかふやらんとの給へば。あんの
3 ごとく兵船なり。さてはさためて大せいなるらん。たとひ一万
4 きなりともうちやふつておちむと思はゝ。一まつは鬼神
5 かむかふたりともいはらふへけれ共。おほくくんひやうをそん
6 じ人民をなやまさんも不便なり。ちよくめいをそむひ
7 てつゐには何のせんかあらん。去ぬる保元に勅かんをかう
8 ふりて。るさいの身となりしか共。此十よねんは当所の主と
9 なつて。心はかりはたのしかり。其いせんも九国をくはんりやう
10 しき。思ひ出なきにあらず。つくしにては菊池原田をはしめ
11 として。西国のもの共は。みな我手がらの程はしりぬらん。
12 都にては源平の軍兵。ことにむさしさかみのらうどう共

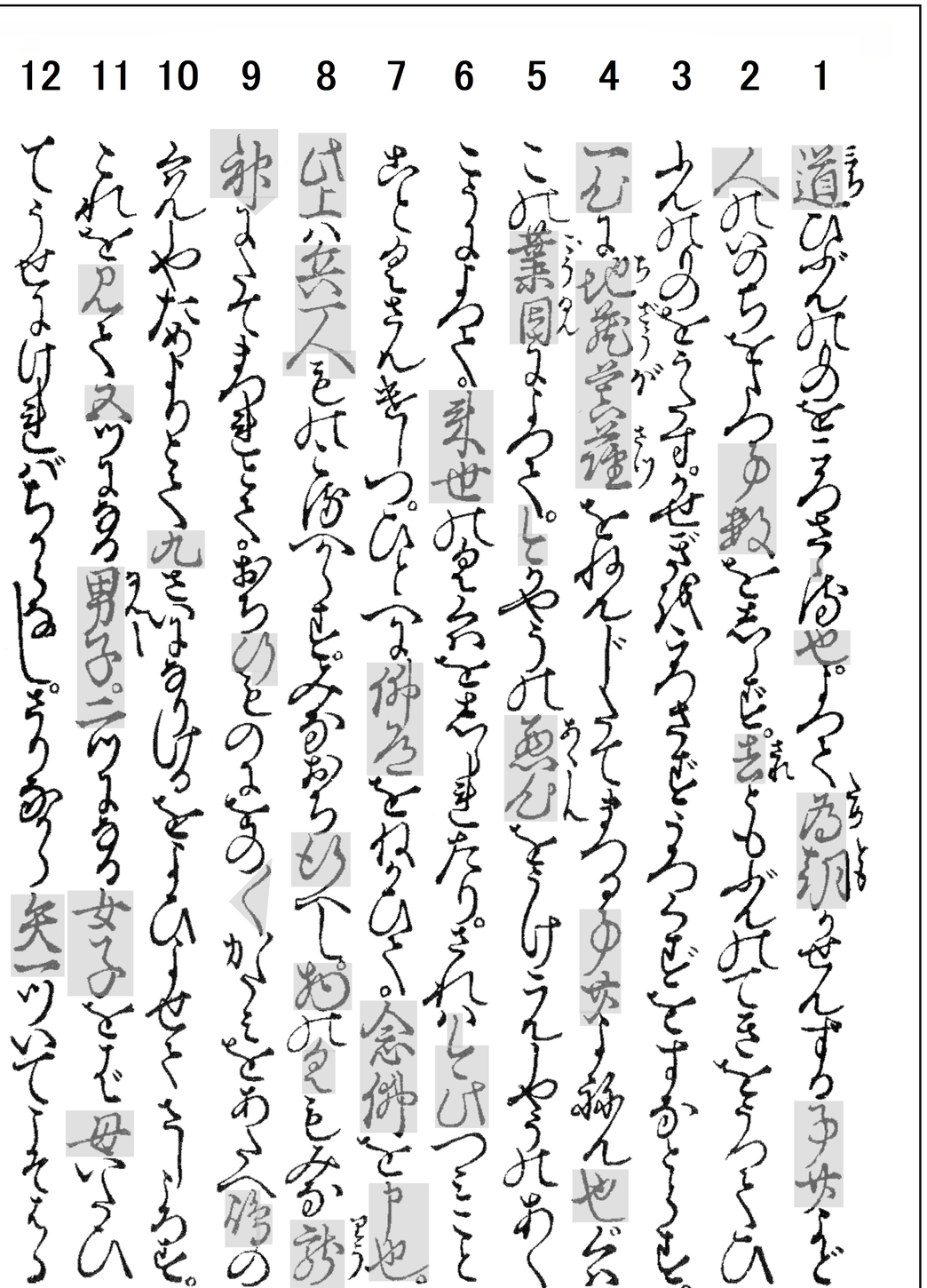
1 とのあきむ人舟やらんおほくつらなつて候と申せば。
2 よもさはあらし。我にうつてのむかふやらんとの給へば。あんの
3 ごとく兵船なり。さてはさためて大せいなるらん。たとひ一万
4 きなりともうちやふつておちむと思はゝ。一まつは鬼神
5 かむかふたりともいはらふへけれ共。おほくくんひやうをそん
6 じ人民をなやまさんも不便なり。ちよくめいをそむひ
7 てつゐには何のせんかあらん。去ぬる保元に勅かんをかう
8 ふりて。るさいの身となりしか共。此十よねんは当所の主と
9 なつて。心はかりはたのしかり。其いせんも九国をくはんりやう
10 しき。思ひ出なきにあらず。つくしにては菊池原田をはしめ
11 として。西国のもの共は。みな我手がらの程はしりぬらん。
12 都にては源平の軍兵。ことにむさしさかみのらうどう共

との給（＝宣）ふ。「あきむ（商）人〔ど〕舟やらん、おほ（多）くつら（連）なつて候（＝そうろう）」と申せば、

「よもさはあらじ。我にうつて（討手）のむ（向）かふやらん」との給（宣）へば、あん（案）のごと（如）く兵船〔ひやうせん〕なり。「さてはさだ（定）めて大ぜい（勢）なるらん。たとひ一万き（騎）なりともう（打）ちやぶ（破）つてお（落）ちむと思はゞ（ば）、一（＝ひと）まづは鬼神〔きじん〕がむ（向）かふたりともいはら（射払）ふべけれ共（＝ども）、おほ（多）くぐんびやう（軍兵）をそん（損）じ、人民〔みん〕をなや（悩）まさんも不便なり。ちよくめい（勅命）をそむ（背）ひてつゐ（遂）には何のせん（詮）があらん。去（＝さん）ぬる保元に勅〔ちよつ〕かん（勘）をかうぶりて、るざい（流罪）の身となりしか共（＝ども）、此（＝この）十よねん（余年）は当所の主となつて、心ばかりはたの（楽）しかり、其（＝その）いぜん（以前）も九国をくはんりやう（管領）しき。思ひ出なきにあらず。つくし（筑紫）にては菊池〔きくち〕・原田をはじめとして、西国のもの（者）共（＝ども）は、みな（皆）我（＝わが）手がら（柄）の程はし（知）りぬらん。都にては源平の軍兵、こと（殊）にむさし（武蔵）・さがみ（相模）のらうどう（郎等）共（＝ども）、

1 我ゆんぜいをばしりぬらん物を。その
2 ろひ弓せんをたいしたるはかりにてこそあらんすれ。た
3 めともにむかつて弓を引かんものはおほえぬものを。今
4 都よりの大将ならば。ゆがみ平氏なとこそ下るらめ。一々に
5 いころして。うみにはめんと思へ共。つゐにかなはぬ身に。む
6 やくのつみつくりてなにかせん。今までいのちをおしむも
7 しせん世もたてなをらば。ちゝのいしゆをもとげ。我ほんまう
8 をもたつせばやと思へばこそあれ。又昔年せつほうを
9 きゝしに。過去ゐんをしらんとほつせは。そのげんざいのくはをみよ
10 みらいのくはをしらんとほつせはそのげんざいのゐんをみよと云へり
11 されはつみをつくらばかならすあくだうにおつべし。しかれとも
12 ぶしたるものゝ殺業なくてはかなはす。それにとつては武

我（＝わが）ゆんぜい（弓勢）をばし（知）りぬらん物を。そのほかのもの（者）共（＝ども）、甲冑〔かつちう〕をよろひ、弓〔きう〕せん（箭）をたい（帯）したるばかりにてこそあらんすれ。ともも（為朝）にむ（向）かつて弓を引かんものはおぼ（覚）えぬものを。今都よりの大将ならば、ゆがみ平氏〔じ〕などこそ下るらめ。一々にいころ（射殺）してうみ（海）にはめんと思へ共（＝ども）、つゐにかなはぬ身に、む（無）やく（益）のつみ（罪）つくりてなにかせん。今までいのち（命）をお（惜）しむも、しせん（自然）世もた（立）てなを（直）らば、ちゝ（父）のいしゆ（意趣）をもと（遂）げ、我（＝わが）ほんまう（本望）をもたつ（達）せばやと思へばこそあれ。又昔年〔そのかみ〕、せつぽう（説法）をき（聞）ゝ（き）しに、「過去〔くはこの〕ゐん（因）をし（知）らんとほつ（欲）せば、そのげんざい（現在）のくは（果）をみ（見）よ。みらい（未来）のくは（果）をし（知）らんとほつ（欲）せば、そのげんざい（現在）のゐん（因）をみ（見）よ」と云へり。されはつみ（罪）をつく（作）らばかなら（必）ずあくだう（悪道）にお（落）つべし。しかれども、ぶし（武士）たるもの（者）ゝ（の）殺業〔せつごう〕なくてはかな（叶）はず。それにと（取）っては武〔ぶの〕



1 道ひぶんのものをころさゝる也。よつて為朝かせんずる事廿よど

道〔みち〕、ひぶん（非分）のものをころ（殺）さゝ（ざ）る也（＝なり）。よつて為朝〔ためとも〕、かせん（合戦）する事廿（＝二十）よど（余度）、

2 人のいのちをたつ事数をしらず。去ともぶんのてきをうつてひ

人のいのち（命）をた（断）つ事数をし（知）らず。去〔され〕ども、ぶん（分）のてき（敵）をう（討）つてひ（非）

3 ぶんのものをうたす。かせぎをころさずうろくずをすなとらす。

ぶん（分）のもの（者）をう（討）たず、かせぎ（鹿）をころ（殺）さず、うろくず（鱗）をすなど（漁）らず、

4 一心に地蔵菩薩をねんじたてまつる事廿よねん也。くは

一心に地蔵菩薩〔ぢざうぼさつ〕をねん（念）じたてまつ（奉）る事、廿（＝二十）よねん（余年）也（＝なり）。くは（過）

5 この業因によつて。今かやうの悪心をうけこんしやうのあく

こ（去）の業因〔ごうゐん〕によつて今かやうの悪心〔あくしん〕をう（受）け、こんじやう（今生）のあく（悪）

6 こうによつて。来世のくくはをしられたり。されは今此つみこと

ごう（業）によつて来世のくくは（苦果）をし（知）られたり。されば今、此（＝この）つみ（罪）こと

7 ことくさんけしつ。ひとへに仏道をねがひて。念仏を申也。

ごとくざんげ（懺悔）しつ。ひとへに仏道をねが（願）ひて念仏を申也（＝もうすなり）。

8 此上は兵一人ものこるへからす。みなおち行へし。物の具もみな龍

此（＝この）上は、兵一人ものこ（残）るべからず。みな（皆）お（落）ち行（＝ゆく）べし。物の具もみな（皆）龍〔りう〕

9 神にたてまつれとて。おち行ものにをの〳〵かたみをあたへ嶋の

神にたてまつ（奉）れ」とて、お（落）ち行（＝ゆく）もの（者）にをの〳〵（各々）かたみ（形見）をあた（与）へ、島の

10 くはんしやためよりとて九さいになりけるをよひよせてさしころす。

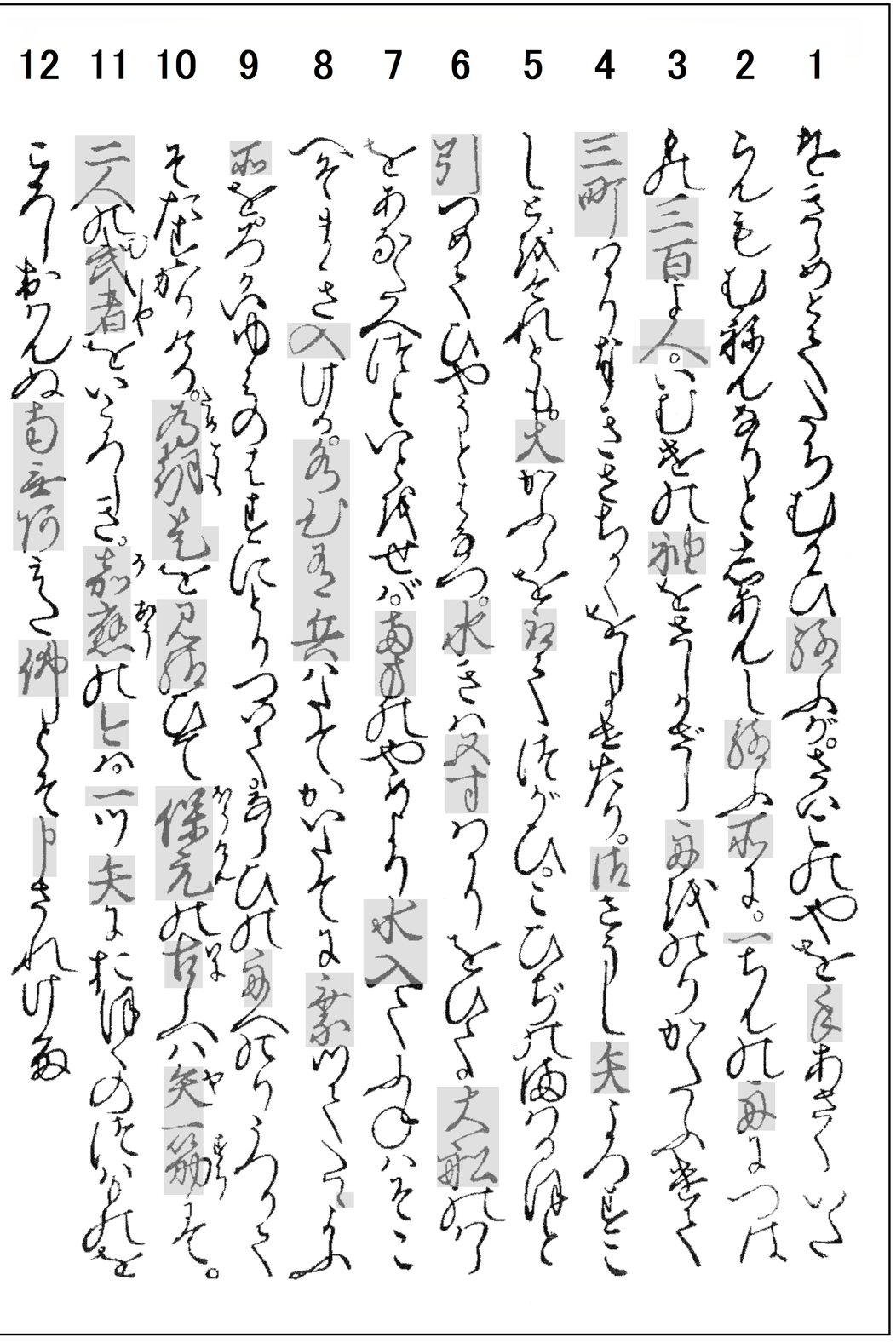
くはんじや（冠者）ためより（為頼）とて九さい（歳）になりけるをよ（呼）びよ（寄）せてさ（刺）しころ（殺）す。

11 これを見て五つになる男子。二つになる女子をば母いたひ

これを見て五つになる男子〔なんし〕、二つになる女子をば、母いだ（抱）ひ

12 てうせにければちからなし。さりながら矢一ついてこそはら

てう（失）せにければちから（力）なし。「さりながら、矢一つい（射）てこそはら（腹）



1 をきらめとてたちむかひ給ふが。さいこのやを手あさくいた
2 らんもむねんなりとしあんし給ふ所に。一ちんの舟につは
3 もの三百よ人。いむけの袖をさしかざし舟をのりかたふけて
4 三町はかりなきさちかくをしよせたり。御さうし矢ころすこ
5 しとをけれとも。大かふらを取てつがひ。こひぢのまはるほと
6 引つめてひやうとはなつ。水きは五寸はかりをひて。大船のはら
7 をあなたへつといとをせば。両方のやめより水入てふねはそこ
8 へそまき入ける。水心有兵はたてかいたてに乗つてたゝよふ
9 所を。ろかいゆみのはすにとりついて。ならひの舟へのりうつりて
10 そたすかりける。為朝是を見給ひて保元の古しへは矢一筋にて。
11 二人の武者をいころしき。嘉応の今は一つ矢におほくのつはものを
12 ころしおはんぬ南無阿みた仏とそ申されける

をき（切）らめ」とてた（立）ちむ（向）かひ給ふが、さいご（最後）のや（矢）を手あさ（浅）くい（射）た
らんもむねん（無念）なりとしあん（思案）し給ふ所に、一ぢん（陣）の舟につは
もの（兵）三百よ（余）人、いむ（射向）けの袖をさしかざし、舟をの（乗）りかたぶ（傾）けて
三町ばかりなぎさ（渚）ちか（近）くを（押）しよ（寄）せたり。御さうし（曹司）、矢ごろすこ（少）
しとを（遠）けれども、大かぶら（鏑）を取（＝とつ）てつがひ、こひぢ（小肘）のまはるほど
引（＝ひき）つめて、ひやうどはな（放）つ。水ぎは（際）五寸ばかりをひて、大船のはら（腹）
をあなたへつといとを（射通）せば、両方のやめ（矢目）より水入（＝いり）てふね（舟）はそこ（底）
へぞま（巻）き入（＝いり）ける。水心有（＝ある）兵は、たて（盾）・かいだて（掻楯）に乗ってたゞ（だ）よ（漂）ふ
所を、ろかい（櫓櫂）・ゆみ（弓）のはず（弭）にと（取）りつ（付）いて、なら（並）びの舟への（乗）りうつ（移）りて
ぞたす（助）かりける。為朝（ためとも）是（＝これ）を見給ひて、「保元（ほうげん）の古（いに）しへは矢（や）一筋（すぢ）にて
二人の武者（むしや）をいころ（射殺）しき。嘉応（かおう）の今は一つ矢におほ（多）くのつはもの（兵）を
ころし（殺）しおは（畢）んぬ。南無阿みだ（弥陀）仏」とぞ申されける。